トロント大学に留学して

The University of Toronto—A Japanese Perspective

本保元次郎*

Genjiro MOTOYASU*

平成4年9月より平成5年8月までの1年間、カナダのトロント大学の金属・材料工学科に客員研究員として滞在し、A. McLean 教授の研究室において加熱鋳型式連続鋳造法（OCC プロセス）について研究する機会を持ちました。留学中は単に研究を進めるだけでなく、多くの人々と出会い、日本人とは異なる物事に対する見方、考え方にも出会うことができました。ここに体験の一部を紹介します。

カナディアンインディアンという言葉で「人の集まる所」を意味するトロントは、ナイアガラの滝から北東へ車で約1時間半、オンタリオ湖の北岸に位置する人口400万人のカナダ最大の都市です。この街は移民の国カナダを象徴するかのように、世界各国からの人々がそれぞれの文化をもって集まり、国際色豊かなメトロポリタンシティ・トロントを形成しています。最近ではアジアからの移民、とくに中国系の移民が増加し、人口の約10%の40万人に達するといわれ、北米最大の中華街はいつも中国系の大勢の人々でごった返しています。ここに来ると、耳に入る言葉は中国語、看板や道路標識も漢字で、一瞬、ほんとうにカナダにいるのかと自分を疑ってしまうほどでした。市内には中華街だけでなく韓国人街、ギリシャ人街、イタリア人街などがあり、トロントはさまざまな国をモザイクのように組み合わせた賑やかな印象を受けた街でした。そして、この街にあるトロント大学もヨーロッパの国々の顔だけでなくアジア、ラテンアメリカ、インド、中近東、アフリカ系などさまざまな風貌の学生が学ぶ大学です。

トロント大学を簡単に紹介致しますと、この大学は、カナダで最も大きく最も古い伝統のある大学で、1827年、トロント市の前身であったヨークタウンに英国国教会がキングス・カレッジを誕生させたことから始まり、1849年にトロント大学として正式に設立されました。現在では、医学部、工学部、文学部、芸術学部など14学部を有する総合大学です。学生数は約5万人、その内大学院学生が約8千人を占めています。トロント大学の中核となるセントジョージキャンパスは、ダウンタウンの中心にあるにもかかわらずあきれるほど広大で、校内に3つの地下鉄の駅があります。また、広いばかりではなく北米で最も美しい大学としても有名で、私の滞在中もよく映画やテレビの撮影に使われていました。19世紀初頭の大学創設当時に建てられたロマネスク様式のユニバーシティカレッジを中心として広がる公園のようなキャンパスには、多くの歴史的な建物が建ち並び豊かな緑と調和して落ち着いた雰囲気につつまれています。しかも、一世紀以上の歴史を刻んだ石作りや煉瓦作りの建物が、今でも当時のままの状態で大切に使われていて、そこには日本の大学にありがちなむだなビラの掲示は一切なく、ましてや落書きなどはまったく目にすることがありませんでした。このようなすばらしい環境で勉強できる学生たちを羨ましく思いました。教会の礼拝堂のような美しいステンドグラスを散りばめた教室で学生たちが真剣に授業を受けている光景は、今でも深く印象に残っています。

一方では新しい建物も点在し、中でも14階建てのロバート図書館は、300万冊の蔵書量の多さもさることながら、建物の美しい外観がそこを訪れる人々に強い印象を与えています。この8階には、東アジア

* 千葉工業大学金属工学科 受理日：平成6年3月4日

ア図書館があり、日本、中国、韓国を中心とした約25万冊の本が納められています。ロバート図書館は、平日は夜中の12時まで、土曜、日曜でも夜10時まで開館されていて、利用する学生の便宜を第一に運営されています。この図書館以外にも、大学には約50の図書館があり、蔵書の総数は700万冊にも及ぶと聞きました。また、私がいつも利用した金属・材料工学科の図書館でも、日本の学会発行の英文雑誌なども簡単に手に入り、また専門書の豊富なことや、充実していることにも驚かされました。

ところで、私の滞在した金属・材料工学科は、広いセントジョージキャンパスの一角のカレッジストリートに面したウォールベルグビルディングとマイニングビルディングにあります。学科のスタッフは、教員16名、研究員10名および技術員7名からなり、学部および大学院学生の教育と研究指導にあっています。大学院学生は、修士、博士課程合わせて約60名在籍していますが、特徴的なことは、彼らは、自分の研究ばかりではなく、専門科目の授業や自分の研究内容を講演するセミナーを行い、さらに希望者は学生実験の指導なども行うことができ、講義と研究以外にも幅広い角度からの教育が行われているように思いました。また、日本の学生とは異なり、大半の大学院生は、数年間社会人を経験しており、そのときの貯えと奨学金を学費と生活の糧としてしていると聞きました。ちなみに、工学部の1年間の学費は、カナダ人の場合、約3000カナダドル（1カナダドル＝約85円）ですが、外国人留学生の場合、4倍の約12000カナダドルと高く、留学生にとって学費の支払いが大変なようでした。奨学金は、政府や国立の研究機関や会社あるいは個人からの研究助成金の一部が主に当てられていて、学生たちは一生懸命に研究することで奨学金を確保しているそうです。

教員も学生も、仕事中はそれぞれの業務に集中しています。日本よりも研究や実験に費やす時間は若干短いようでしたが、朝9時から夕方5時まで集中して行うので、実質的には研究成果があがっているように思いました。また、議論も盛んに行われ、常に、教授も学生も対等の立場で、自分の論点をはっきりとしかも頑固に主張し合っていました。しかし、いったん自分の誤りに気がつくとすぐに相手の意見を受け入れる態度は、学すべきものでありました。

毎週木曜日の午後に開かれるセミナーでは、毎回一人の大学院生が講演を担当します。各人1年に約1回の持ち回りですので、在学中に修士課程で2回、博士課程で3回程度、講演の順番がまわってくるそうです。順番に当たった学生は1ヵ月以上も前からセミナーに向けて念入りに準備を進めているそうです。また、講演の下準備もさることながら、講演の進め方や表現の仕方そしてまとめ方などには、感心させられる点が多くありました。このセミナーでは、講演者と出席している教員や学生および博士研究員との間で、全員が納得するまで活発な討論が続けられていました。一方、彼らは研究に集中したあとは休養も十分にとります。午後5時以降は、一部のパートタイムの学生の講義を除いては、校舎内には人影も少なく、事務室やコンピュータールームも5時で施錠され、7時には建物の入り口のドアの鍵まで閉められてしまいます。一つには、研究機材等の盗難防止のためであるという話を聞きました。土曜日と日曜日は完全に休みで、学期末やクリスマスなどの休暇もたっぷり取ります。夏に2ヵ月間大学を留守にする人も珍しくなく、この時期に仕事を頼んでも、休みが明けるまで何も進展しないことがよくあり、諦めるかのんびり待つしかありませんでした。

帰国準備も済ませた8月の終わりに、CIMの学会に出席するためケベック市を訪れました。モンリオールを抜けての片道8時間の列車の旅でしたが、そこはもうフランス語圏、何となくカナダの広さが印象に残りました。

最後に、トロント大学への留学にご理解とご協力をいただいた多くの方々に心より感謝いたします。